

没後100年 近代フランス “サン=サーンス” 第2回 音楽の父

プログラム

今年は近代フランス音楽の父”とも言われるフランスの生んだ大作曲家サン=サーンスの没後100年の記念の年に当たります。今日はサン=サーンス特集の第2回目をお送りします。

1871年、フランスにおける器楽音楽の発展をめざして「国民音楽協会」を設立したサン=サーンスは、新しい交響楽運動が起こりつつあった当時のフランスの状況を踏まえ、この時期から急速に管弦楽曲や室内楽曲の作曲に力を入れ始めます。「死の舞踏」、「オンファールの糸車」等の交響詩、ピアノ協奏曲の第2番から第4番、ヴァイオリン協奏曲の第1番から第3番、チェロ協奏曲第1番、ピアノ三重奏曲第1番、第2番。ピアノ四重奏曲などの主要作が、20年余りの間に集中的に作曲され、創作の最盛期を築いていきました。その間、1861年にフランスの最高位勲章である「レジオン・ドヌール勲章」を受賞。1881年には学士院会員に選ばれ、1892年ケンブリッジ大学は名誉音楽博士の称号を贈りました。1906年初めてアメリカを訪問。1916年にはパナマ太平洋博覧会にフランスの代表として出席、その足で南米を訪問するなど、その足跡は海外まで及びました。1921年何度目かのアフリカ旅行の途中、12月16日、サン=サーンスはアルジェリアのホテルで86年の生涯を終えました。

晩年のサン=サーンスは、天才的な作曲家、優れた技巧を持った名ピアニスト、オルガニストであったと同時に、19世紀フランスの典型的な教養人として、自ら詩を書き、豊富な知識と広い視野とを十分に示した論文も発表しています。19世紀末から20世紀初頭にかけてサン=サーンスの名声は絶大でした。しかし彼の死後、すべてのジャンルに及ぶ多作ぶりが軽んじられ、評価の定まらない時期もありましたが、その後再評価が進み、今日では近代フランス音楽の基礎を築いた大作曲家として高く評価されています。
(中川)

カミーユ・サン=サーンス (1835~1921):

チェロ協奏曲第1番イ短調 op.33

ミツシヤ・マイスキー (チェロ)

セミヨン・ビシュコフ指揮パリ管弦楽団

(1993.1.27 パリ、サル・プレイエルでのLive)

組曲“動物の謝肉祭”

マルタ・アルグリッチ (ピアノ) / アントニオ・パツパーノ (ピアノ) / 竹澤恭子 (ヴァイオリン)

豊嶋泰嗣 (ヴァイオリン) / ミツシヤ・マイスキー (チェロ) / ラファエル・マロツツイ (ヴィオラ)

デイゴ・ロマーノ (チェロ) / アンドレア・オリヴァ (フルート)

ステファノ・ノヴェリ (クラリネット) / アントニオ・シヤンカレポーレ (コントラバス)

アンドレア・サンタルシール (パーカッション)

(2018.12.16 ローマ、聖チエチーリアホールでのLive)

*** 休憩 ***

ピアノ協奏曲第5番ハ長調 op.103 “エジプト風”

～第1楽章から、第2楽章、第3楽章

スヴァトスラフ・リヒテル (ピアノ)

クリストフ・エツシエンバッハ指揮シュトゥットガルト放送交響楽団

(1993.5.30 シュヴエチンゲン、ロココ劇場でのLive)

ヴァイオリン協奏曲第3番イ短調 op.61

シルヴィア・マルコヴィチ (ヴァイオリン)

マルチエツロ・ヴィオッティ指揮サールブリュッケン放送交響楽団

(1993.6.27 サールブリュッケン、コンGRESハレ大ホールでのLive)

曲目解説

チェロ協奏曲第1番イ短調作品33

サン=サーンスの円熟期に入った1872年、38歳のときの作品で、曲はパリ音楽院の教授で作曲家でもあり、チェロの名手であったオーギュスト・トルベックに献呈され、1873年1月19日、トルベックのチェロ独奏、パリ音楽院管弦楽団の演奏で初演されました。全体は単一楽章の形式を取っていますが、大きく3つの部分に分かれていて、それらが3楽章の協奏曲と同じような形態を作り上げています。巧みに処理された管弦楽に引き立てられ、チェロの叙情豊かな音色が、美しい旋律をうたう一方、技巧的な変化に富んだ曲想は、ソリストが自由に手腕をふるえるように作られています。古今のチェロ協奏曲の中でも演奏会で取り上げられる機会が多く、このジャンルの名曲のひとつとして知られています。

第1部 アレグロ・ノン・トロツポ 第2部 アレグレット・コン・モート 第3部モルト・アレグロ

組曲「動物の謝肉祭」

サン=サーンスが1886年、友人のチェロ奏者シャルル・ルブークが毎年主催する、謝肉祭の最終日に行われる音楽の夜会(ソワレ)のために書き上げたのがこの「動物の謝肉祭」です。1886年3月9日の初演の際には、サン=サーンス自身のピアノと夜会のホストであるルブークの他、当時のフランス楽壇の名手たちが出演しました。その後2回の非公開のコンサートを最後に、サン=サーンスはこの作品の演奏を禁止しました。この曲にはの3まな亀や大柄な象を風刺するために、オッフエンバックの「天国と地獄」のガロップやベルリオーズの「ファウストの劫罰」の妖精の踊りなどをパロディ的に使い、チエルニーの教則本でレッスンするピアノ入門者たちも、動物あつかいされて登場します。本来この曲は仲間私的に楽しむために作曲されたため、彼は道義上その公開演奏と楽譜の出版を禁止したのでした。ただ、「白鳥」だけは完全なオリジナルだったため、演奏と出版が許可され、全曲の公開演奏は彼の死後、1922年2月26日、パリで行われました。今日ではサン=サーンスの最もポピュラーな名曲として親しまれています。

- 第1曲 序奏と獅子王の行進 (2台のピアノと弦5部)
- 第2曲 めんどりとおんどり (クラリネット、2台のピアノ、第1・第2ヴァイオリン、ヴィオラ)
- 第3曲 野生のらば (2台のピアノ)
- 第4曲 亀 (第1ピアノと弦5部ーオッフエンバック「天国と地獄」～終幕のバレエと第一幕フィナーレ)
- 第5曲 象 (第2ピアノとコントラバスーベルリオーズ「ファウストの劫罰」～妖精の踊り)
- 第6曲 カンガルー (2台のピアノ)
- 第7曲 水族館 (フルート、グラスハーモニカ、2台のピアノ、第1・第2ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ)
- 第8曲 耳の長い登場人物 (家畜の3ばを意味する 第1・第2ヴァイオリン)
- 第9曲 森の奥に住むカッコウ (クラリネットと2台のピアノ)
- 第10曲 大きな鳥かご (フルート、2台のピアノと弦5部)
- 第11曲 ピアニスト (2台のピアノと弦5部)
- 第12曲 化石 (木琴、2台のピアノと弦5部、クラリネットーフランス民謡から数曲、自作の「死の舞踏」他)
- 第13曲 白鳥 (チェロと2台のピアノ)
- 第14曲 終曲 (ピッコロ、クラリネット、グラスハーモニカ、木琴、2台のピアノと弦5部)

ピアノ協奏曲第5番へ長調作品103「エジプト風」

サン=サーンス最後のピアノ協奏曲である第5番は、1896年に開催されるサン=サーンスのパリ楽壇デビュー50周年の記念演奏会で、ピアノを受け持つことになった自身が演奏することを想定して作曲されました。1894年に着手し1896年に完成、1896年5月6日にサン=サーンスのピアノとタファネルの指揮で初演され、友人のピアニストであったルイ・ディエメに献呈されました。タイトルの「エジプト風」は、第2楽章でエジプト風の異国情緒の漂う旋律が多用されていることに由来しています。華やかな名人芸が随所に折り込まれている一方、より自由で磨きのかかった老練の味が感じられる名作です。

第1楽章 アレグロ・アニマート 第2楽章 アンダンテ 第3楽章 モルト・アレグロ

ヴァイオリン協奏曲第3番イ短調作品61

円熟期を迎えていた1880年の作品で、第1番や「序奏とロンド・カプリチオーソ」と同様、スペインの鬼才サラサーテに献呈され、1881年1月2日、パリでサラサーテの独奏で初演されました。古典的なスタイルを継承しながら、華やかな技巧とサン=サーンスらしい美しい旋律が見事に調和され、ドイツ的とも思える堅固な構成力でまとめ上げています。これは若い頃のドイツ留学で培った教育によって育てられたためかも知れません。古今のヴァイオリン協奏曲の中でも一際完成度の高い傑作です。

第1楽章 アレグロ・ノン・トロツポ 第2楽章 アンダンティーノ・クワジ・アレグレット
第3楽章 モルト・モデラート・エ・マエストーソー アレグロ・ノン・トロツポ